

ポケットモンスター  
Re：インカネーション

天兔フウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

HPゲージは存在せず、技をぶつけたら相殺され、技も特性もシステムのではなく、指しをすれば攻撃を避ける。果てには擬人化したポケモンまでいる始末。

ゲームを元にしながらも、どこかおかしいポケモンの世界で頂点を目指す転生者の話。

# 目次

|         |    |
|---------|----|
| Re:スタート | 1  |
| 船上      | 15 |
| カイナシテイ  | 31 |
| 不正解     | 46 |



## Re:スタート

——偶然だった。

ただ無気力に過ごす日々。夢か現かも分からないまま、周りに合わせて動く空っぽの生活。

全ての過去がゼロになり、全ての可能性がゼロになる新しい人生。

一度は考えたことがあるだろう。一度は願ったことがあるだろう。人生のやり直しの夢に浸った、強くてニューゲーム。

夢にまで見た出来事は、夢だからこそよかつたのだと思い知る。もしかしたら、今も夢を見ているのかもしれない。そんな感覚のまま生きていた。

いつもと同じ一日。いつもと同じ時間。いつもと同じ公園で、空を眺めていた。

家に帰りたくないという、3歳の子供らしい願い。しかし、そこに秘められている思いは全く別のもの。

ここが違う世界だと知った。ここは現実じゃないと思った。このゲームに似た世界

に、期待を持つとうとした。不安を抱こうとした。楽しもうとした。苦しもうとした。けれど、抱いたものは虚無感のみ。空を見上げる瞳は虚ろで空っぽ。世界は灰色に染まり、音は滲んで聞こえた。

変わらないと思っていた。同じ日々が続くと思っていた。だが、その日は違った。この日からは変わった。

たまたま帰る時間が遅かった。たまたまいつもと違う道を通った。理由は覚えてない。理由なんてない。

周囲は鬱蒼とした森。迷うはずがないのに、気づけば知らない場所にいた。

頭上で輝く黒い星に、凍っていた感情が久しく揺らいだ。

漠然とした不安を覚えながら、無心のまま、無意識に、夢遊病者のようにふらふらと歩き続ける。

出会ったのは小さな生き物。どこにでもいる、ありきたりなポケモン。

◆  
——その出会いは偶然運命だった。

——鳥の鳴き声で意識が覚醒する。

「……………んあ……………ふう」

欠伸をしながら体を起こしカーテンを開けると、窓際に止まっていたヤヤコマが羽音を響かせて飛び立つ。何となくその姿を見送った後、ゆつくりとベッドから立ち上がった。

「……………懐かしい夢を見たな」

二年ぶりに家に帰ってきたからだろうか、なんてセンチメンタルな気分で呟く。昔にもこんなことがあった気がしたが、はつきりとしたことは思い出せず、悶々とした気持ちになって髪の毛を掻き乱す。

その時不意に視界に入った赤色の髪。

「この身体になって、もう十年か……………」

寝起きにも拘わらず、ほとんど癖がない綺麗な赤髪を弄りながら呟く。

部屋の壁に立てられた全身鏡の前に立てば、中性的な容姿をした美少年が鮮やか真紅の瞳を向けていた。

我ながら素晴らしい美少年だな。などと未来の勝ち組人生を自画自賛しながら、昨日のうちに用意しておいた服に着替える。

「ああ、ようやく十歳だ」

零れ落ちた言葉は、先ほどセリフと矛盾していた。だが、どちらの言葉にも嘘はない。それだけ十歳という年が特別なものなのだ。

それにしても——と部屋を見回す。綺麗に片づけられた部屋には埃一つ落ちていない、とても丁寧に掃除されていることが一目で分かる。

二年間の間家を出ていて、帰ってきたのが二日前。何の連絡もしていなかったのにここまで綺麗なのは、きつと家にいない間も親が掃除をしてくれていたのだろう。

普通の子供とは違うというのは自分でもわかっているのに、ここまで大切にしてくれる親には頭が下がる思いだ。

生まれてこの方迷惑ばかりかけているが、これから始まる目標を達成できれば、少しは親孝行になるかもしれない。

先のことを考えながら再び鏡の前に立つと、抑えきれない笑みが浮かんでいた。

「本当に楽しみだ」

「ずいぶん気合が入ってるな」

部屋の入口に視線を向ければ、いつの間にか少女が立っていることに気が付く。

背中まで流れる美しい黒髪に此方を見据える鋭い赤色の目。首からは動物の毛を使った黒いマフラーを巻かずにかけている。胸を強調するようなタンクトップも黒色



で、ショートパンツに至っても同じ色。全体的に黒で纏められたラフな格好の少女。

今の部分だけを言えば、普通の少女だろう。しかし、普通とは違う点が二つ。

それは、背中から見える黒い大きな尻尾と、頭についた二つの獣耳。

「おはよう、月禍<sup>げっか</sup>」

「ああ、おはよう。マスター」

自分で付けた名を呼べば、少女は笑って挨拶を返す。

そう、彼女は人間ではない。本当にどういうわけか、月禍はポケットモンスター、縮めてポケモンと呼ばれる存在なのだ。

ポケモン、それは以前の記憶であれば、創作、空想上のファンタジーでしかなかったもの。それが何故か現実中存在し、さらに人の形をとっている。

まったく、人生は何が起こるか分からない。

「それで、いったいどうしたんだ？」

「そうだった。母上がそろそろ飯ができるってさ」

「分かった。すぐ行くよ」

人型。彼女のようなポケモンはそう呼ばれている。

元のポケモンと同じ能力のまま、人の形をとった存在。

人型の数は決して多くはなく、野生で出会う可能性はほぼないと言っている。

それでもトレーナーの手持ちにはそれなりの数の人型がいることから、人間に対する感情が大きくかわっているだろうと言われている。

だが、それでも人型の数は少ない。このことから自分の勝手な予想で、ある程度の能力値を持ったポケモンでないと人型になれないのではと考えているが、ゲームとは違い個体値を簡単に確認できないこの世界では実証するのは難しい。

まあ、その辺りは研究者に任せておけばいいだろう。

この世界はゲームとは違うのだから、仮説が当たっているとは断定できない。

そう、ゲームとは違うのだ。彼女たちはデータ上の存在ではなく、この現実で生きている。

そして、今日から俺はポケモントレーナーで、彼女たちの命を預かる存在なのだ。

決意を新たにし、これから始まる新しい冒険に期待を膨らませながら、月禍の後を追った。



玄関でトレードマークのようになった赤いパーカーに腕を通し、誕生日プレゼントに親からもらったスニーカーの紐を結ぶ。

最後に、腰につけられたホルダーを確認して全ての準備が終わる。

「——それじゃあ、行つてきます」

母親の声を背に受けて、抑えきれない気持ちを表すように駆け出した。

向かう先はトレーナズスクール。そこから、トレーナーとしての第一歩が始まるのだ。

ポケモントレーナー、十歳以上の大人がなれるれっきとした職業。

チャンピオンともなれば年収は軽く億を超えと言われ、一攫千金のロマンを求めてトレーナーになる人は多い。

もちろんトレーナーは誰にでもなれるというわけではなく、簡単な一般常識とポケモンについての筆記試験に合格しなければならぬ。しかし、この試験はあくまでも最低限のマナーを守ることができかを判断するためのテストのため、余程のことがなければ合格できる。

俺は試験を受けてはいないが、二年前にトレーナズスクールを卒業しているので、その時点でポケモントレーナーになれることは確定していた。

試験に合格し10歳以上になればトレーナーカードを貰うことができ、それがトレーナーカードの証明証となる。

俺は今からこのカードと御三家のポケモンを受け取りに行くのだ。

御三家のポケモン。ゲームでは最初の手持ちとして選べる初心者用のポケモンだ。地方によって異なるが、必ず炎・水・草の三つのタイプのうちから一体を選ぶことができる。

この措置はこの世界にも存在していて、15歳以下であれば、トレーナーカードとマルチナビとともに受け取ることができる。俺は既に自分のマルチナビとポケモンを持つているが、15歳以下なのでルールが適応され、ポケモンを受け取ることができる。これから出会う新たなポケモンに期待を膨らませていると、家を出て五分程度でトレーナズスクールに到着した。

しかし、なんというか――

「冒険感が足りない」

「あなたは何を言ってるのよ」

横を向くと、そこにはタンクトップ姿でカメラを持った見知った少女。

「おはようございます、ピオラ先輩。単にBGMの偉大さを再確認しただけですよ」

「おはよう、リンネ君。あなたは時々頭のおかしなことを言うよね」

「酷いですね。俺ほど常識と良識に満ち溢れた美少年はいませんよ」

「ごめんねちよつと何言ってるか分からない」

ハハハ

「流石、8歳の子供に負けた大人は言うことが違いますね！」

「……いやいや、手加減されたのに勝ち誇ってるリンネ君ほどではないかな」

「子供に手加減して負けてくれるとは、ジムリーダーはお優しい」

隣で何かが切れるような音が聞こえたが、きつと気のせいだろう。とりあえず鼻で笑っておく。齢14でジムリーダーの座に就く天才少女も、ちよつとからかつてやれば年相応で可愛らしい。

何やら捲し立てているピオラをスルーしてトレーナーズスクールの中を見渡す。家を出たのはそんなに遅くないはずなのだが、既に50人以上の子供たちが集まっていた。表情からは不安や期待が見え隠れしており、独特の緊張感が漂っている。

「そういえば、ピオラ先輩は何でここに？」

「この先生にジムリーダーとして挨拶を頼まれちゃってね」

ようやく落ち着いたららしいピオラに尋ねると、一瞬イラツとした表情を見せたものの質問に答えてくれた。

トレーナーカードを配るのも私だしね。という言葉に、ジムリーダーって大変なんだなー。などと適当な感想。

「とりあえず話は短くお願いします」

「……あなたたつて本当に可愛くない子供ね」

「今日から大人の仲間入りですよ」

中身が子供じゃないから。なんて言うわけにもいかないので、適当に笑って誤魔化す。

そろそろ時間ですよと言ってやれば、ピオラは子供たちの前の方に向かって行った。そうして始まる挨拶。内容は要約すればポケモンとの絆を大切にして頑張れといったもの。

俺の要望を反映してくれたのかは分からないが、話は五分とかからずに終わり、トレーナーカードを渡す為に名前が呼ばれ始める。順番はID順。つまり卒業が確定したのが早かった者からだ。そして、一番最初に呼ばれる名前は俺。いつになく真面目なピオラの前に出てカードを受け取る。

「はい、これでリンネ君も正式にポケモントレーナーになったね」

「ありがとうございます」

「ポケモンはバトルフィールドにいるから、そこから好きな子を一匹選んでね」

「わかりました」

新人トレーナーはそこら辺をあまり気にしないが、長く付き合っていくポケモンの相性はとても重要だ。ゲームとは違い、相性が悪ければ言う事を聞いてくれなかったり、

場合によってはポケモンに攻撃される事もある。

最も、トレーナーによってはポケモンに寄り添い、ポケモンと共に成長するタイプもいる為、相性が絶対というわけではない。しかし、自分はそんな王道の主人公のようなタイプではないので、ポケモンとの相性はかなり重要視する必要があった。

この後に出会うポケモンのことを考えていると、ピオラが耳元に近づいて小声で喋る。

「あなたとのジム戦楽しみにしてるわよ。今度は本気で勝つから」

そう言っただけでピオラはニッコリ。

俺も思わずニッコリ。

「俺、これからハウエン地方に行くので気長に待っていてください」

「えっ……」

唖然とするピオラに、スマイルを添えてからクルリと反転。

背後からの怒声をBGMにして、バトルフィールドに向かった。

「さて、ここか」

トレーナズスクールに設置されたバトルフィールド。ここでは五十匹以上のポケモ

ンが好き勝手に遊びまわっていた。

見張り役として端に立っている教員に軽く会釈をして、フィールドの中央に立つ。

『マスター。私がやろうか?』

「いやいい。このレベルなら俺でも十分だ」

ボールの中から話しかけてくる月禍にそう答えて周囲を見回す。

フィールド内にいるポケモンは全部で三種類。フォッコ・ケロマツ・ハリマロン。

この中で欲しいポケモンは既に決まっている。

あとはどの個体を選ぶかの問題なのだが、これが中々に難しい。

俺も実力のあるポケモントレーナーだと自負しているが、これだけ同レベルのポケモ

ンが多いと、さすがに強さの判別はつけにくい。

それに、時間をかければ分かるかもしれないが、この場で性格や相性を見極めるのは

困難だろう。

だから、少々手荒な方法をとることにする。

「動くな」

たった一言。しかしそれは、トレーナーとしてポケモンを統べる為の言霊。圧倒的強

者であることを示す力。

それを見せつけければ、全てのポケモンがピタリと動かなくなる。



上位のトレーナーであれば誰でもできるようなこと。それだけに、低レベルのポケモンには絶大な効果を持つ。

支配者としての言葉に震えるポケモンたちを見渡し、選別する。怯えではなく、強い光を持った目で此方を見据えるポケモンは二匹。

フォッコとケロマツ。俺はそのうちの欲しいポケモン、フォッコの前に立つ。

震えながらも、鋭い視線で俺を見定める瞳をのぞき込み、問う。

「勝ちたいか？」

主語のない漠然とした一言。しかし、それ以上の言葉は必要ない。ただ瞳で、ついてこれるか？ そう聞いた。

力強く頷くフォッコ。それを見て思わず柔らかな笑みを浮かべ、フォッコを抱き上げる。

見た目以上に重たい体。炎ポケモンらしい高い体温。それを肌身で感じながら宣言した。

「よし、君に決めた。お前は今日から不知火だ。<sup>シラヌイ</sup>よろしくな！」

——さあ、一緒にこの世界を楽しもう！

こうして、新しいポケモンを手持ちに加え、新しいトレーナー人生が始まる。

## 船上

——思い出す。

『どうやら良い子を見つけたみたいね』

『ええ、お陰様で』

街から外れた草むら近く。

不知火を抱いたまま言葉を返す。

『で、わざわざ追いかけてきて何か用ですか？』

『あら、お別れの挨拶じゃダメだったかしら』

『はい』

『ぶちのめすわよ』

『敗者が何ほざいてるんですか』

気の知れた相手だからこそそのやり取り。お互いにガンを飛ばしあう。

そのまましばらく時間が経過し、飽きてきたところのため息を吐き不毛な争いに終止符を打つ。

僅かな静寂。

『——どうしてハウエン地方に行くのかしら』

眩くような小さな問いかけ。

ポツリと、雫が溢れたように返した。

『——倒したい相手がいる』

『……そう、誰なの？』

『秘密です。ただ、帰ってきた時はチャンピオンとして会いに来ますよ』

『なるほどね』

再びの静寂。

『いいんじゃない、いいんじゃないの！ 君がチャンピオンになれるか、ここで試してあげる！』

手に持つのはモンスターボール。

合図はいらない。

『行くわよ、リンネ君！』

『負けませんよ、ビオラ先輩！』

同時に——投げた。



「あー……暇だ」

船の上、波に揺られながら思わず呟く。

4月ということもあってデッキの潮風は冷たい為、船に乗ってからはずっと部屋に籠っていた。

事前に予約していたホウエン地方行きの船に乗って一時間。外の景色を眺めるのにも、そろそろ飽きてきていた。

『主様、<sup>マスター</sup>お茶でもご用意しましょうか？』

「いや、どうせだから船内を探索してみるよ。舞姫のお茶はまた今度頼む」

相変わらず舞姫は世話を焼くのが好きだと苦笑。

せつかくだからということ、それなりの値段のする船のチケットを買った為、船内の設備はかなり良いものになっていたはずだ。

あと一時間もすれば昼食にちょうどいい時間になるし、どうせだから色々見て回ろうかと考えながら腰元のボールに手を伸ばす。

ピンポン玉サイズのボールの中央にあるスイッチを押すと、ボールがこぶし大のサイズに変化した。

「出ておいで、不知火<sup>シラヌイ</sup>」

「フオウ！」

ボールを投げずに手先だけで開閉すると、白い光が溢れフオッコが現れる。相変わらぬの謎技術に首をひねりつつ、不知火の体を持ち上げる。

フオッコの体重は約10kgと10歳の子供には結構な重さだが、身体を鍛えるのはトレーナーの基本中の基本であり、この程度の重さならば軽々持ち上げられる。目下、イシツブテ合戦を目指してトレーニング中だ。

「それじゃあ行くかうか」

不知火を腕に抱えて部屋に鍵をかけ、モフモフを楽しみながら船内の探索に向かう。

もちろん不知火を外に出しているのには理由があつて、あまり外に出たことがないこいつに色々見せてあげることと、ゲーム的に言えばなつき度を上げる為にボールから出しているのだ。あとは何といつてもこのモフモフ。

不知火はホウエン地方についたらさっさと進化させてしまつてもりなので、今のうちに存分に楽しんでおきたい。

「不知火は何か気になるところはある？」

「フオウ、フオッコ！」

船内の案内図を見ながら胸元のモフモフに向かって問いかける。

豪華客船ということもあって、バーやカジノ、プールなど、遊ぶ場所には困らない。そんな中、不知火が前足で指示したのは、この客船の中で一番広いスペースがとられている場所。6階のバトルフィールド。

「まあ確かに時間潰しには持つてこいだけど、何でこうも俺の手持ちは血の気が多いんだ」

エレベーターのボタンを押しながら思わず呟けば、腰に付けたモンスターボールが何かを訴えるようにカタカタと揺れる。不知火も抗議のつもりなのか、前足で俺の腕をポポフと叩いた。可愛い。だが男だ。

しかし、俺がそうなるように選んだからだというのは分かっているが、こうも一斉に抗議されると何だか納得いかない。

この世界において、ポケモンを選ぶうえで重要なのは個体値などではなく、相性が重視されることが多い。いくらそのポケモンが強くても、トレーナーとの相性が悪ければバトルでは絶対に勝てないのだ。

故に俺が選んだポケモンが戦闘狂なのは必然なのだが、理屈と気持ちは別の問題だろう。

納得いかない気持ちを、不知火をモフモフすることで誤魔化していると、エレベーターの扉が開き、見慣れた光景が目に入ってきた。

中央に設置されたバトルフィールド。その端で二人のトレーナーが対峙しており、フィールド内には二体のポケモン。

片方はハリボーグ。レベルは見た感じで20前後といったところか。既にその身体はボロボロで、あと一撃でも食らえば戦闘不能になるだろうと見て取れる。

対するはカエンジシ。こちらのレベルは20中盤辺りだろう。こちらには傷らしきものは見当たらず、ほぼダメージを受けていないだろうと簡単に予想できた。

「あれじゃあ既に勝負ありだな」

言ったそばからカエンジシの“かえんほうしゃ”が放たれ、ハリボーグが倒れる。同時に男性のトレーナーが悔し気に表情を歪ませ、女性のトレーナーが笑顔でカエンジシに声をかけた。

同時に沸き上がる歓声。それに応える女性トレーナー。

「どうやらあの様子だと、何連戦かで勝ち続けているようだ。」

「フオッコ、フオウフオッコ！」

「ん？ 戦いたいのか？ 結構レベル差があるから大変だと思っただけだ」

「フオッコ!!」

大丈夫だと胸を張って見せる不知火。現在の不知火のレベルは進化一步手前辺り。レベル差が10近くある上に、相性もあまりよくないのだが、ここまでやる気を見せら



れたのなら、やるしかないだろう。

不知火が手持ちに加わって3日間。レベル上げよりも努力値稼ぎや技の習得に徹していた。ゲームでは勝つことはまず無理だろうが、この世界ならばいくらでも方法はあ

る。  
バトルフィールドに進み出て女性トレーナーに声をかける。

「次、俺とバトルしませんか？」

「いいわ、相手をしてあげる」

「ルールは1対1、道具の使用はなし。これでいいですね？」

「ええ。それじゃ始めましょうか」

目と目が合ったら勝負の合図とまで言われる世界だけあって、簡単にバトルの許可が出る。

お互いにフィールドの端にあるトレーナー用の白線の中に入り、準備は完了。

腕の中にある不知火を一度強く抱きしめてから、解放する。

「行ってこい、不知火！」

「出番よ、カエンジシ！」

フィールドの中央に書かれた線を挟んで向かい合う二匹のポケモン。

公式戦ではないバトル。開始の合図はお互いのトレーナーの指示だった。

「おにびー！」

「カエンジシ、かえんほうしゃー！」

発する言葉は最低限に。伝える内容は最大限に。

不知火の周りにぼつぼつと浮かび上がった炎がカエンジシに向かって殺到するが、“かえんほうしゃ”によって相殺され、爆発を巻き起こす。ゲームでは有り得ない現象だが、この世界では当たり前。

故に判断を迷う必要はなく、三手先まで考えながら次の指示を伝える。

「サイコシヨック」

「かわしなさい！」

前後左右を囲むように展開したサイコシヨックが放たれるが、カエンジシはそれを跳躍することで回避する。だがそれは想定内。

「サイコキネシス！」

腕を振り下ろしながら指示すれば、不知火のサイコキネシスがカエンジシを捉える。

本来であればレベル差によりほんの一瞬しか捉えられないが、空中で拘束してしまえば力尽くで抜け出すのは難しくなる。それでもレベル差により長くは持たないが、少しでも時間があれば十分。

不知火によって拘束されたカエンジシは、そのまま地面に叩きつけられた。

「立ちなさいカエンジシ。ほのおのキバ！」

「サイコシヨックを張れ！」

猛スピードで距離を詰めてきたカエンジシの目の前に、サイコシヨックの弾幕を配置する。

目眩しを重視した為、ダメージはあまり期待できないが、隙を作るのには十分だ。

「サイコキネシス！」

先ほどとは違い念波のように放たれたサイコキネシスはカエンジシの急所を狙い撃ち、フィールドの端まで大きく吹き飛ばした。

ゲームではないからこそ可能な急所の狙い撃ち。こういった部分でトレーナーの実力が出てくると言ってもいい。

ゲームでは、相手のポケモンに対して相性などを考慮しながら次の一手を考えるだけだったが、この世界においてはそれだけでは十分とは言えないのだ。

立ち上がったカエンジシの状態から、体力の残りが半分を切つたと判断する。不知火のサイコキネシスが後二回急所に入れば確実に落とせるだろう。

対してこちらは、ほぼノーダメージ。だが、レベル差により一撃を耐えられるかも怪しい。それは向こうも理解しているはずだ。さて、どう動くか。

「カエンジシ、かえんほうしゃ！」

「避けるー！」

言葉に意志を乗せ、動きを誘導する。

指示に従って不知火が横に飛ぶと、直後に炎が先ほどまでいた場所を焼いた。

余波でジワリと体力が削れるが、行動に支障はない。

「サイコシヨックー！」

先ほどと同じくカエンジシの四方を囲むように光が配置される。しかし、相手が二度も同じ手に乗るとは思えない。

だからこそ、俺は二度も同じ手を使うつもりはない。

「かえんほうしやで薙ぎ払って」

「おにびから、ニトロチャージー！」

「うそ!?!」

展開されたサイコシヨックは、かえんほうしやで消し去られたが、それは目くらましとなる。

直後、カエンジシの目の前に現れた不知火が回避する間もなく“おにび”を当て、ついでとばかりにニトロチャージで鼻面を撃った。

まさか自分から近づいてくるとは予想していなかったのか、驚き指示が遅れる。

その間に不知火は下がっており、既に接近攻撃の間合いから外れていた。

「やってくれたわね……!」

「お褒めに預かり恐悦至極」

悔しそうに睨みつけてくる女性に、笑って皮肉。

こういった心理攻撃は案外大きな効果をもたらしたりするので、もはや息をするように嫌味を言えるようになった。

良いことか悪いことかは別として、効果的なことには間違いない。相手よりも優位に立っているように見せ、自分の心理的余裕にも繋がるのだ。

「くっ、カエンジシ。かえんほうしゃ!」

「かわせ」

何度も見ているだけに、既に俺の指示がなくなるともかえんほうしゃを回避できるようになっている。

不知火が軽々と炎を避けた。そこに迫るカエンジシの巨体。

「ほのおのキバ」

「回避だ!」

ニトロチャージで上がったすばやさの数値でも、レベルによる大きな差がある為、かなりギリギリの回避になる。

それを期と見たか、相手はこれで決めるという意気込みが入った声で指示を出した。

「やりなさい、だいまんじ!!」

回避後の不安定な姿勢。詰められた距離。

この状態では当然回避が間に合うはずもなく、不知火の身体を業火が焼いた。

——予想通り。

思わず口角が上がり、同時に不知火の身体がボフンという音と共に煙となる。

「みがわり!?!」

「行け! サイコキネシス!」

いつの間にかカエンジシの正面にいた不知火が、急所に狙いを定めてサイコキネシスを放った。

ぐらりとカエンジシの身体が傾く。そして——

「——耐えて、カエンジシ!」

倒れる直前相手の声が響き、カエンジシが渾身の力で踏ん張った。

「何っ!?!」

完全に倒したと思っていた。予想外の出来事に驚愕の声が出る。まさか——と刹那に考えがよぎる。

思考にできた本当に僅かな一瞬の空白。しまったと思った時にはもう遅く、その空白は確実な反撃を許してしまった。

「だいまんじー！」

放たれた炎が大の字に広がり、瞬く間に不知火を飲み込んだ。10以上のレベル差は容赦なく不知火の体力<sup>H</sup><sub>P</sub>を焼き尽くしていき――

“ とうそうほんのう ”

豪ッ！

そんな音と共に、不知火が炎の中から飛び出した。その姿はボロボロでありながらも、瞳には強い闘志を宿している。

レベル差がある？ そんなもの、負けていい理由になるわけがない。

退くのは良い。だが臆するな。倒れるのは仕方ない。しかし負けるのは認めない。

不知火と心が重なる。

「嘘でしょ!?!」

今度は立場が逆になった。

当然その隙を逃す手はない。

「不知火!」

名を叫ぶ。

指示は必要なかった。

“もうか”

“オーバーヒート”

一瞬の静寂。そして、今度こそカエンジシの巨体が地に沈んだ。

小さく安堵の息を吐く。

「お疲れ様、不知火」

歓声が爆発した。まあ当然と言えるだろう。今まで無敗だったカエンジシが、明らかに格下の相手に対していいようにやられてしまったのだから。

こうして観客がいる中でのポケモンバトルは経験が少ないが、歓声を浴びるのは中々に気持ちいい。

レベルが技術によって覆る。技術が指示によって覆る。指示が戦術によって覆る。戦術がレベルによって覆る。これだから、ポケモンバトルは止められない。

最後のピンチは完全に俺が油断していた所為だったが、不知火のおかげで乗り越えられた。



「どうだ不知火？ 楽しかったか？」

俺の元に帰ってきた不知火に声をかけてやれば、元気のいい返事が返される。

やはりコイツを仲間にしてよかったと再確認して、不知火を腕の中に閉じ込めた。

そこへ近づいてくる人影。

「完敗だわ。まさか格下のポケモンに、あそこまでしてやられるなんてね」

「ギリギリの勝利だったけど」

「それでも、負けは負けよ」

カエンジシをモンスターボールに戻した女性トレーナーは、そう言って小さく笑った。

こうして間近で見ると結構な美人だ。年齢は俺の2から3つ上くらいだろうか。黒いミニスカート制服に金髪と中々に特徴的な見た目だが、何より目を引くのは右耳についたピアス。

「次は本気で勝負したいですね」

「そうね。その時は君の本気も見せてね」

流石にトレーナーとしての能力とポケモンのレベルが合っていなかったからか、俺が単なる新人トレーナーでないということは分かっているらしい。

「じゃあこれ賞金ね」

そう言ってマルチナビを弄り、こちらへと向けてくる。俺もマルチナビを取り出して相手のマルチナビにかざせば、ピピツと機械音が鳴って賞金が渡された。

当然この技術もお金の管理も安心安全のポケモンリーグ。

うーむ、相変わらぬの謎技術。

「そうそう、君の名前は？」

「俺はリンネ。貴女は？」

「私はアヤカ。楽しい勝負だったわ。また戦いましょう」

アヤカは身体を反転させ、軽く手を振ってから歩いていく。

次はどうしようかと時計を見ると、既に正午を回った時間。意識すれば急に空腹感が襲ってくる。

バトルで結構緊張していたのかもしれない。

「そろそろ、お昼ご飯にしようか」

俺が呟くように言うと、腰のボールが大きく震え、不知火が嬉しそうな鳴き声を上げる。

今日は不知火がよく頑張ってくれたし、手に入れた賞金で良いものでも食べようかと考えながら、フィールドを後にした。

## カイナシティ

カイナシティの港。客船から降りて春の暖かい陽気を肌身で感じながら、一度大きく伸びをした。

「ああ……久しぶりの陸地。そして、初めましてハウエン地方」

誰ともなしに呟いて、新たな冒険の始まりを実感する。

やはりゲームとは違い街の規模も数十倍になっており、様々な店が並んでいた。

今後の予定としては、カナズミシティに二日間滞在したあと一気にトウカシティまで向かうつもりなので、その間にしっかりと休憩を取りながら色々と観光しておきたい。

とりあえず予約しておいたホテルでチェックインをさっさと済ませ、自分の部屋でこれから二日間の予定を練る。

「今日はカイナ市場に行ってみよう思ってるけど、みんなはどうだ？」

机の上に置いたボールに向かって尋ねると、全てがカタリと一回揺れた。それを肯定と受け取り、モンスターボールをホルダーに仕舞う。

しかし、モンスターボールの中から声がかげられ手を止めた。

『なあマスター。一緒に出かけないか?』

「うん? 別にいいけど、急にどうしたんだ。月禍<sup>げっか</sup>?」

ボールから月禍を出し、問いかける。一緒に出かけるということは、デートのお誘いだろうか?

前から時々突然甘えてくることはあったが、デートに行こうと言われたのは初めてな気がする。

まあ、デートとは言っても別に俺と月禍は恋人というわけではない。恋人以上に分かり難い存在なのは確かだが、残念ながら恋愛をするにもこの体は若すぎるし、そもそも種族的な問題がある。

……過去にはポケモンと結婚した人間もいるらしいが。

「最近、不知火<sup>シラヌイ</sup>に構ってばっかですまらなかったんだよ」

「ああ、なるほど。それは悪かったよ」

謝りながら、身体を預けてくる月禍に思わず苦笑する。身体を摺り寄せてクンクンと匂いを嗅ぐ姿は、まるで犬のように見える。……狼だから間違いではないかもしれないけれど。

それにしても、相変わらず人型は不思議だ。よく見れば元のポケモンと似ている部分も見つけられるが、一目でそれを見抜くのは難しい。

月禍も、黒と灰色という配色は元の姿を思い起こさせるが、一発でグラエナであると分かる人はほとんどいないだろう。

これはバトルでも大きなアドバンテージになるため、人型を使うトレーナーは読みにくいと言われる所以となっている。

「それじゃあ行くうか、マスター」

「そうだな」

腕を組んで身体を押し付けてくる月禍を、実に可愛らしいものだと思いきや、受け止める。

しかし悲しきかな、今の俺は十歳児。二十センチ近くある身長差に格好が付かないかと内心でこぼし、早く身長が伸びるようにと割と切実に願った。

カイナ市場。ゲームでは街の端にあるちよつとしたショップの集まりで、ゲームガチ勢ではなかった俺は、最初にこううんのおこうを買って、後から貰ったおまもりこぼんにガツカリした記憶しかないが、やりこんでいる人なら、がんばり屋にお世話になったことがある人も結構いるだろう。

しかし、それ以外には特に印象に残るものはない小さな市場だったはずだ。だが、こ

の世界においてこの場合はハウエン地方一の大規模市場だ。

「うわあ……すごい」

「随分人が多いな」

市場の活気に思わず圧倒される俺の横で、月禍がお祭り状態のような人込みを見て眩く。

別に人込みが嫌いなわけではないが、あの中に入るには少し勇気が必要そうだ。

俺が躊躇つてもたもたしていると、突然腕が引つ張られ強制的に人込みの中に突入させられる。

「行こうマスター。はぐれないように、しっかり手を繋いでてくれよ」

「……それ、俺から言うべきセリフだと思っただけだな」

釈然としないが、10歳の子供ではこの人込みで見失う可能性が高いのは分かっている。抵抗することは無い。月禍をモンスターボールに入れて歩けばその問題もなくなるかもしれないが、デートをしたいと言っているのにそれは野暮というものだろう。

半ば月禍に引つ張られるような形で、様々なシヨップを見て回る。シヨップとは言うても多くが露店形式の為、一つ一つの店に滞在する時間は短い。

ゲームであったようなお香屋やがんばり屋、もちろんゲームにあったものだけでなく、木の実を売っている店や普通の野菜を売っている場所もある。

港町ということ、魚市場などはかなり繁盛しているようだ。時々規格外品のように床に投げ出されているコイキングを見かけ、思わず合掌する。

滞在時間が短いとはいえ、数が数。興味を惹かれるままに歩き回っていれば、時計の針はいつの間にか正午を大きく回っていた。

「マスター、腹減った」

「あ、もうこんな時間か。そうだな、どつか店に入るか？」

「んー」

既に2時を過ぎていることに気が付き周囲を見渡しながら訊ねるが、月禍は返事をせず何かを考え込むように目をつむる。

どうしたのだろうかと頭を捻り月禍の顔を見ていると、くんくんと、空気の匂いを嗅いでいることに気が付く。やっぱり犬だ。

「どうしたんだ？」

「アレがいい」

月禍の顔を見ているのに飽きることはないが、途切れたままに動かない間に何となく焦れて訊ねる。疑問に答えることなく、スツと目を開いた月禍は人混みの奥を指さした。

その先を視線で辿ると、人々の隙間から大きな肉の塊が回っている露店が目に入る。

確かドルネケバブだったか。

かなり目立つ店だが、先ほどは人混みのせいで見逃していたのだろう。見た目のインパクトも含め、かなり興味を惹かれはするが――

「アレだけじゃ足りないだろ」

「あー、そうだな」

ボールの中にいるポケモンも含め、露店の食べ物だけでは満足とはいかないはずだ。だが、月禍の願いを却下するのは気が進まない。となれば、

「食べ歩きにしようか」

「偶にはそういうのもいいな」

ここが妥協点といったところか。ポケモンバトルは言うなればスポーツのようなもので、当然トップレベルともなれば食事にも気をかけなければならぬのだが、こういう日もあっていいだろう。

「ありがとな、マスター」

「いいって。それよりも早く食べよう」

「そうだな！」

月禍の笑顔に、やっぱり食べ歩きにして良かったと満足する。

人々を掻き分け間を縫い露店へと向かう。未だその手は繋がれたまま。



技マシン屋では持っていない有用な技マシンを買いあさり、ボールショップでは念のため、手に入りにくいクイックボールなどの類を補充しておく。

そうして市場のほぼ全ての店を周っていると時間はあつという間に経過し、気づいたころには日が傾き始めていた。

「そろそろいい時間だけど、どうする?」

時計を確認し、隣で満足そうに笑う月禍に問いかける。

日が傾きだすと共に、だんだんと人が少なくなりもう手を繋いでいる必要はなくなつたのだが、月禍はまだ手を握つたままだ。まあ、それについては既に諦めているのでいいだろう。

残りの場所で行っていないのは、アクセサリーなどの小物売り場。俺はそういうものには疎いし、月禍もあまり気にする方ではない。だから、もう帰るかと確認したのだが、「どうせだから、最後まで見に行かないか?」

「——わかった、行こうか」

少し名残惜しそうな顔でそんなことを言われては、断るといふ選択はなくなるというものだろう。

◆  
カイナシティの外れ。草むらにほど近い広場で、まだ少し冷たい朝の空気を胸いっばいに吸い込み大きく伸びをする。

「ふう……よし、やるか」

息を吐いて気合を入れる。

モンスターボールを二つ手に取り、投げる。

光の奔流から姿を現す二つのシルエツト。

片方はフォッコの進化形であるテールナー。

そしてもう一人、出てきたのは人型。露出の多い和服のようなものを赤い帯で止め、シヨートパンツを履いた女性。

長い髪は金髪で、先端に行くにつれて赤のグラデーションがかかっている。手に持った、目の覚めるような蒼穹と心を落ち着かせるピンク色の入り混じった不思議な色の扇子は、不思議と女性に似合っていた。

「不知火、舞姫まいひめ。準備はいいか？」

「テーナー！」

「ええ、問題ありません」

二人の返事に頷き返し、不知火の後ろについて舞姫と向かい合う。

これから始めるのは、最近習慣になってきている不知火の朝練、レベル上げだ。

考えてみれば当たり前なのだが、この世界ではゲームとは違い、一度のバトルでそう簡単にレベルは上がることはない。この世界における経験値とは言葉のまま文字通りの意味であり、学習装置で得られる経験値には限界があるのだ。低レベルのポケモンにいくら知識があろうとも、実際に身体を動かさなければ強くなることなどできない。

しかし、ゲームより得られる経験値が少ないからと言って、ゲームよりレベルが上に行くののかと言えれば決してそんなことはない。

「行くぞ不知火。おにび」

出した指示に従い、無数に浮かぶ火球が舞姫へと迫る。しかし舞姫は事もなげにおにびを一瞥すると、ふわりと手元の扇子を煽ぐ。どうなっているのか、その扇子の軌道から現れた水の噴射が火球を跡形もなく消し去った。

無言で不知火にサイコショックの指示を与え、舞姫の周りに幾つもの光が展開される。だがそれすらも、舞姫が薙ぎ払うように振った扇子により、あっけなく吹き飛ばされた。

——まあ、当然だろう

不知火にサイコキネシスの指示を与えながら頭の片隅で考える。

舞姫は、月禍に続く俺の二番目のポケモンだ。そのため、レベル100など相当前に到達している。未だに30手前の不知火では相手になるはずもないだろう。

それを証明するように、不知火のサイコネシスは全くダメージを与えられていない。

「サイコショック、続けてニトロチャージ」

だが、だからこそ不知火のレベル上げには最適だった。

ゲームの常識ならば、ポケモンは戦闘によつて相手を倒すことで経験値が入り、レベルが上がるという仕組みだ。

だがこの世界では、別に戦闘で相手を倒さなくても経験値が入る。

故に、レベルがはるか上の舞姫との戦闘は、経験値が多く得られるのでレベル上げに最適なのだ。

逆にレベル差がありすぎる舞姫には、ほとんど経験値が入ることはない。というか、それで経験値が入ってしまうとしたら、いくらなんでも理不尽過ぎるだろう。

不知火のニトロチャージを折り畳んだ扇子で受け止める舞姫を見て、思わず内心で呟く。

それに、レベルを上げる方法は戦闘だけではない。

例えば、レベルの低いポケモンに限界まで運動させるだけでも経験値は入る。だか

ら、この世界のトレーナーは戦闘だけでなく、そのポケモンに合ったスタイルでレベルを上げる手腕も必要になってくるのだ。

その例で言うなら、努力値も同じことが言える。

これもゲームとは違い、相手を倒すことだけで得られるものではない。まあ、俺の言う努力値はゲームと同じものと言いだしいので別物かもしれないが。

例えば、同種・同レベルのポケモンが二匹いるとする。片方はボールの中で何もせず  
に過ごしていて、もう片方は毎日ボールから出て身体を動かし続けている。

この場合、どちらの方が運動能力（能力値）が高いかは言うまでもないだろう。つまり、俺の言う努力値とはそういうものだ。

当然かもしれないが、やはりゲームとは違う部分が沢山ある。

——それは、不知火がみがわりで舞姫の不意をついたことで証明できる。

おにび・サイコシヨック・サイコキネシス・ニトロチャージ・みがわり。

ゲームでは有り得ない、四つ以上の技の習得。だが、それがこの世界では可能なのだ。もちろん、決して簡単なことではない。この世界には、技の習熟度というものが存在する。ゲームでは、技は簡単に覚えることが可能だが、ここではそうはいかない。

何故なら、ポケモンの技とは、あくまで技術なのだから。

覚えるだけなら確かに簡単だろう。しかし、使いこなせるかどうかは別だ。

“はいこうせん”という技が存在する。ノーマルタイプの特特殊技で、威力150という驚異的な破壊力を持つが、その威力が故に使用後の反動がある技だ。

ゲームならば、この反動というのは1ターンの間行動できなくなるといったものが、この世界では本当に物理的反動があるのだ。だから、習熟度がゼロの状態でははいこうせんを使うと、まともに当てることできないどころか、自分がダメージを負うこともある。

当然、習熟度を上げるにはそれなりの鍛錬が必要であり、バトルで使いこなせる技は4つに絞るのが基本だ。

この習熟度というシステムは実に奥が深い。

ゲームでは覚えた技をカタログスペック通りに使用することしかできなかったが、ここではそれ以上のことができる。

例を幾つか挙げてみよう。

先ほどの“はいこうせん”は反動がある為に難易度が高い技だが、極めることができる。反動を無くすことができる。

マツハパンチを毎日一万回使い続けていけば、いずれ技名通り音を置き去りにすることだってできるだろう。

——例えば

みがわりで不意を突かれ背後を取られたとき、全方位になみのりを使いながら、同時にれいとうビームを使って相手を氷の海に閉じ込めることだって可能なのだ。

「とりあえずここまでだな」

そう声に出して朝練の終了を告げる。吸い込む空気は、先ほどよりも冷たくなっていた。

その発生源、二メートル近くある氷の波を一足で飛び越え、中央にぽっかりと空いた穴の中に着地した。外側から見る氷も綺麗だったが、内側から見るとまた違った芸術性が見えてくる。

何より、氷の海の中央で悠然と立つ舞姫はとても美しかった。

世界一美しいポケモンというのが誇張でないことが良く分かる。

「お疲れ様。相変わらず舞姫の技は綺麗だね」

「ありがとうございます、マスター主様」

口元に扇子を当て優美に微笑む舞姫。しかし、その行為が照れ隠しするときの癖だと知っている俺からすれば、実に可愛らしく見える。

どこことなく微笑ましい視線に気が付いたのか、少し拗ねたように顔をそっぽに向ける。だが、気づかれないようにチラリと視線だけをこちらに向けているのが何ともいじらしい。そんな気持ちが伝わったのか、照れ隠しも兼ねてさらに顔を背けてしまう。

無限ループになりそうな状況に苦笑して、モンスターボールに手を伸ばす。

「悪いけど、この後トウカシテイに向かうから、それまでゆっくり休んでいてくれ」

「かしこまりました。主様の仰せのままに」

流麗に頭を下げる舞姫に、お疲れ様と呟いてからボールを向けた。舞姫のボールを腰に仕舞い、何気なく周囲の氷を見回す。

……不知火が氷漬けになってから約1分。

「——そろそろかな」

その言葉と同時に、氷の海が内側から砕け散った。降り注ぐ結晶が朝日を受けて輝く  
中、氷の中から炎を周囲に従えた不知火が現れる。

本来なら舞姫にでも頼めばもつと早くに氷を砕くことはできたが、こうして自力で脱  
出させることも技の習熟度や努力値振りに繋がるのだ。

「よく頑張ったな、不知火」

「テナー！」

元気に返事をする不知火からは、ほとんど体力Hが減Pっていないのが見て取れる。

やはりこういった部分で調整ができる舞姫は流石だ。他の手持ちは手加減が苦手な  
奴らばかりなので、本当に助かる。

「お疲れ様」



一声かけてから、不知火をボールの中に入れる。今日はこの後のことを考えて朝練も短いものにしておいた。

あと1時間もしたら、カイナシティとはしばらくお別れだ。

目指すはトウカシティ。そこで初めての公式戦——ジム戦に挑むのだ。

## 不正解

——大きく息をする。

「…………ふう」

目の前にあるのは簡素な建物。その入り口に掲げられる、モンスターボールに三角を足したような形のシンボル。トウカジム。

原作では主人公の父親が待ち受ける5番目のジム。しかし、ゲームではないこの世界に、ジムを攻略する正規の順番など存在しない。

このジムを最初にしたのは、弱点を突かれる心配がないということと、後に回すと厄介なことになることが分かりきっているからだ。

——もう一度、深呼吸をする。

「…………よし」

自分を鼓舞するように小さく呟く。負けるなんて微塵も思っていない。勝利は既に確信している。

だが、初めてのジム戦は妙に緊張した。多分、これから俺の本当のトレーナー人生が

始まるように感じているからだろう。

原作はどのシリーズも、バッジを集めながら最終的にポケモンリーグへと挑むという形で始まる。最初のジム戦は、原作を知る俺にとって新たな冒険のスタートと同義なのだ。

——無意識のうちに、手がモンスターボールに触れた。

ふと、力が抜けた。腰についたホルダーの重み。それを認識しただけで、思考は普段通りのものに戻る。何も緊張する必要はなかった。俺は何時も通り、こいつらと世界を見て楽しみ尽くすだけだ。

自分の意志を再確認して、嗤う。もう一度ホルダーに手を当て、モンスターボールを軽く撫でた。

「それじゃあ、行こうか」

ジムの扉を開け放つ。



ジムの内装はジムリーダーの自由にされている。トウカジムに入った第一印象は、学校にある武道場だった。

転生する前のことを思い出して少し懐かしく思っていると、フィールドの奥にいる男を見つめる。赤いジャケットを着た短髪の男は、こちらの存在に気が付くと奥から下駄を鳴らして歩いてきた。

土足で板張りの床を歩くことに何となく罪悪感を感じながら、俺も男に近づきバトルフィールドの中央で向かい合う。

「トウカジムへようこそ。君はチャレンジャーでいいのかな？」

「はい、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

トウカシティ・ジムリーダーのセンリ。ゲームでは主人公の父親であり、初期に寄る町ながら6番目に挑むことになる、ノーマルタイプ使いのジムリーダー。性格は真面目で堅実。その性格に裏打ちされた隙のないバトルを得意とする。ノーマルタイプという汎用的なパーティー構成ながら、ホウエン最強のジムリーダーとも目されていて、俺が最も警戒しているジムリーダーだ。

「私がジムリーダーのセンリ。バトルを始める前に、君のバッジは幾つか確認していいかい？」

「二応、ジム戦は初めてですね」

含めた言葉の意味を悟ってくれたようで、センリは小さく笑ってから了解したと言っ

た。

ジムはポケモンリーグへの出場権を得る為だけではなく、トレーナーの実力を試す場でもある。その為、ポケモンが強すぎても簡単には勝てないように、ポケモンレベルとバッジの数によってルールが調整されている。後半になればなるほどジムリーダーも全力を出してくる為、自分が有利になるような順番でジムを回るのもリーグ出場のテクニクとなる。

「じゃあルールは3VS3のシングルバトル。持ち物はいいが道具の使用はなしで、レベルは50フラットでいいかな？」

「はい、大丈夫です」

俺の返事を聞いたセンリは、少し待っていてくれと言ってジムの奥へと歩いて行った。

50フラットというのは、ポケモンのレベルが50を超えていても強制的にレベルを50にできるというルールだ。

この技術もポケモンリーグのものであり、詳細は分からない。ジムなどの大型バトル施設にしかない辺り、恐らく移動はできない巨大な装置なのだろう。

センリが戻ってきたところで、ポケモンマルチナビを開き手持ちのポケモンの状態を確認すると、全てのポケモンのレベルが50になっていた。

このマルチナビの機能はモンスターボールと連動して中のポケモンの状態を確認できるというもの。ポケモンリーグの科学力は本当にどうなっているのだろうか。

内心首を傾げながらトレーナーカードを審判に提示してからフィールドの端まで移動し、トレーナー用にひかれた四角の白線の中に入る。

「準備はいいかい！」

「いつでも行けます！」

反対側から声をかけてくるセンチリに、頷きながら返す。

俺の返事を聞いたセンチリは、フィールドの横にいる審判に視線を移し、小さく頷いた。「これより、チャレンジャーリンネ対ジムリーダーセンチリの、トウカジム、ジム戦を始めます！」

審判の言葉を聞いて、腰に手を回す。

先にボールを投げたのはセンチリ。

「行け、ヤルキモノ！」

ボールから溢れた光が形を取り、フィールドにヤルキモノが姿を現す。

ヤルキモノ、進化系統の中で唯一やる気を出した姿で、今までの反動かじつとしていることができないポケモンだ。それを証明するように、フィールドに出たヤルキモノはボクサーのようにステップを踏んでいた。

——これなら予定通りで大丈夫だな。

内心で呟いてボールを手取る。これから始まるバトルの気配を感じ取ったのか、武者震いでもするようにボールが大きく震えた。

小さく笑って、ボールを投げる。

「楽しんで来い、不知火！」

『了解、マオスター』  
『フオウ、クオオン』

ボールから零れる青い光。やがてそれは地に落ち、形を作る。

光が晴れ、中から現れたのは、赤一色のどこか魔法使いや呪術師を思わせる古風な姿をしたポケモン。長身の姿をより一層引き立てるのは、自身の身長に迫る巨大な杖。その先端には、どういう原理か静々と炎が揺らめいていた。

「マフオクシーか……」

少し目を見開いたセンリは、すぐにその目を細めて不知火を観察している。カロス地方のポケモンはかなり珍しい為、センリが驚くのも無理はない。

一手目に言葉は必要なく、事前に決めたハンドサインで動きを示す。

不知火の周囲に浮かび上がった鬼火がヤルキモノに向かって殺到するが、どれも身軽は動きでかわされてしまう。

かなり素早さが高いようだが、アレなら不知火でも十分についていける。

「ヤルキモノ、グロウパンチ！」

「かわしてサイコシヨック！」

一気に距離を詰めてくるが、分析通り不知火は大した苦労もなく攻撃を避けて見せる。そのまま距離を取りながらサイコシヨックを展開した。

物理威力を持った光が射出され、ヤルキモノに直撃する。しかし、あまりダメージを与えたようには見えない。急所を狙ったつもりだったが、ジムリーダーはそこまで簡単には行かないらしい。

恐らく、進化の奇石を持たせた物理受け。物理ダメージを与えるサイコシヨックより、特殊技を使った方が賢明か。

「シャドークロー」

「回避しろー！」

表面上は淡々と指示しながらも、内心で思わず舌打ちする。

接近して振るわれる両手の攻撃を不知火は危なげなく回避するが、中々距離を取らせてもらえない。

ゴースト技は、エスパークタイプを持つ不知火には効果抜群だ。ゴースト技を仕えたのは想定外だった。流星にヤルキモノの覚える技までは覚えていない。事前に調べておくべきだった。



「逃がすなヤルキモノ！」

「不知火、おにびを待機させて吹き飛ばせ！」

まわりつづくように距離を詰めるヤルキモノ。しかし、その動きが不知火の周囲に浮かぶ鬼火で阻害される。

そして一瞬ヤルキモノの体勢が崩れ動きが止まった瞬間、サイコキネシスの暴力的念波がヤルキモノを吹き飛ばした。

「マズい！ 距離を離すな！」

「今だ！」

焦って一息で距離を縮めてこようとしたヤルキモノ。

予想通りの状況に待つてましたと指示を出す。

“くさむすび”

ヤルキモノの足下に現れた草が、そのまま足首に絡みつき、地面に強く倒れこむ。しかし、それだけでは終わらない。

“サイコキネシス”

草原のように大量に現れた草は、倒れこんだヤルキモノの身体を包み込むように縛り上げていく。

本来ゲームでは有り得ない攻撃方法。技と技の息継ぎをなくし、掛け合わせることで

本来の技よりも更に性能を引き出す技術。

“ コンビネーション ” と呼ばれるその攻撃は、いとも簡単にヤルキモノの動きを封じて見せた。

「なにっ!？」

センリの声が入りに入り、思わずニヤリと笑う。

そして、最後の指示を叫ぶ。

「不知火、止めだ！」

“ オーバーヒート ”

限界まで抑え込まれた炎が、ヤルキモノに向かって解放される。

草によって縛り付けられたヤルキモノに回避する手段などなく、膨大な熱量を持った熱線が直撃した。

やがて轟々と燃える炎が勢いを失う。全ての草が焼き尽くされ床についた焦げ跡の中心で、ヤルキモノは力なく倒れ伏していた。

「ヤルキモノ、戦闘不能！」

「……お疲れ様」

審判の声を合図に、ヤルキモノがボールの中に戻っていく。

「不知火もお疲れ様」

まだまだ余裕だよ  
「クオオオオオン」

「まあ一旦休んでくれ」

ノーダメージで切り抜けることはできたが、最後のオーバーヒートで“特攻”が下がっているので、念を入れてボールに戻ってもらう。

センリがボールを持ったのを確認して、自分も新たなポケモンを出すべくボールを手に取る。

「頼んだぞ、マッスグマー！」

暗黙の了解として、ジムリーダーが先にボールを投げた。現れたのはイタチのような、細長いシルエットのポケモン。

ジムらしく統一されたタイプのポケモンなので、対処を考えるのは比較的楽だ。マッスグマーも事前に出てくると予想されていたポケモンなので、焦る必要もない。

冷静に手を考え、勝ち筋が見えていることを確認して、ボールを投げた。

「決めるぞ、舞姫」

「かしこまりました」

ボールから出た舞姫は、凜とした佇まいで相手を見据える。

「人型だと……う？」

哑然とした声を出しながらも、表情を引き締めるセンリ。希少性はもちろんだが、人型というのはジムリーダーが警戒するほどに厄介な存在なのだ。

もしこれで、俺の手持ち半数以上が人型だと知ったらどうなるだろうと、少しだけ悪戯心が沸いた。もちろん情報のアドバンテージは重要なので、本気ではないけれど。

とはいえ、人型の強みである元の種族を知られにくいという点は、センリにはあまり通用しないだろう。元の種族が知られないということは、タイプが分からないということにも繋がり相当有利のだが、センリはノーマルタイプのポケモンを使うので、他よりアドバンテージがない。

「舞姫」

「かしこまりました」

名前を呼ぶだけで彼女は指示を理解した。舞姫が扇子を一振りすると、「ねっとう」が不意打ち気味に放たれる。

卑怯に思えるかもしれないが、これはゲームではない。審判の役目は戦闘の開始と、戦闘不能、勝者の判定だけであり、ポケモンがフィールドに出た時点でバトルは始まっているのだ。

当然ながら、ルールを人一倍理解しているジムリーダーが油断しているわけがない。

「回避して、はらだいこー！」

容易にねつとうを避けたマツスグマは、はらだいこを叩き始める。

はらだいこは使用時に体力を半分も削るが、同時に攻撃のランクを最大まで上げることができ、リスキーながらも破格の性能を持つ技だ。ランクが最大まで上がった場合、攻撃の威力が4倍にもなると言えば脅威が分かるだろう。

ゲームでも、マリルリが「はらだいこ」を使った後に、先制がとれるアクアジェットを使う戦法は有名だ。

だからこそ、それへの対策は取ってある。

「弾き飛ばせ」

「それでは、さようなら」

指示を出すと同時に舞姫が距離を詰め、はらだいこを叩き終えた隙だらけのマツスグマに扇子で強烈な一撃を食らわせた。

次の瞬間、マツスグマの身体が光へと変化し、逆再生を見ているかのようにボールの中に戻された。そして、センリの残った1つのボールから強制的にポケモンが引きずり出される。

センリの最後のポケモンは、伝説並みの種族値を持つことで有名なケッキング。

「なっ!? ——ドラゴンテールかッ!!」

動揺したのは一瞬。すぐに立て直したセンリは状況を把握し、一発で舞姫の使った技を当てて見せた。

流石としか言いようがないが、少しの間は取り戻せない。

「凍らせろ」

“ なみのり ”

“ れいとうビーム ”

扇子を煽ぐ動きに連動するように舞姫の前に巨大な氷の波が出現し、混乱するケツキングを問答無用で飲み込み凍結させた。

圧倒的な攻撃力と体力が持ち味のケツキングだが、こおりの状態異常になってしまつては持ち前の力を発揮することはできない。

つまり、これで詰みだ。

「ふう……私の負けだな」

「では、勝者はハクダンシテイのリンネ！」

少し苦々しい表情をしたセンリは、ため息を吐きながら負けを宣言し、審判が勝敗を判定したのを確認するとケツキングをボールに戻した。

「よし、よくやった舞姫」

「ありがとうございます、マスター主様」

舞姫がボールの中に戻ったところで、ほっと安堵の息を漏らす。案外あっさりと終わったが、それでも無意識のうちに力が入っていたらしい。

肩から力を抜いたのを見計らったように、センリが歩いてくる。

「素晴らしいバトルだった。私の完敗だよ」

「ありがとうございます」

「バランスバツジだ。受け取ってくれ」

センリが渡してきたジムバツジを丁寧に取り取る。

「……バランスバツジ、ゲットだぜ」

小さく呟いて、バツジをしまう。

まだお互いに戦えるポケモンは残っていたが、あれ以上やっても結果は決まり切っている、所謂“詰み”の状態になった為、予想以上にあっさりとバトルが終わった。

だが、センリの最後の表情を見る限り、あの状況をどうにかする手段があったのだろう。それをしなかったのは、俺がバツジを1個しか持っていないからか。

ジムリーダーは勝つために戦うわけではなく、相手の実力を測ることが仕事の為、チャレンジャーと本気のバトルをすることを許されていない。

しかし、できることならば――

「――次は本気で戦いたいですね」

俺の言葉にセンリはキョトンとした表情を浮かべ、次第にそれが笑みに変わった。

「――そうだな。楽しみにしているよ」

そう、本気で戦う方法はある。チャレンジャーに本気を出せないのならば、チャレンジャーではなく挑まれる側になればいい。

8月から開催されるポケモンリーグ。

目標はチャンピオンだ。